

巻頭言

〈小特集 2〉
第 2 回東アジア間文化現象学会議

Special Issue 2:

The Second Conference for Intercultural Phenomenology in East Asia

2022 年 2 月 26 日、立命館大学・間文化現象学研究センターと中国・中山大学哲学系の共催で、「第 2 回東アジア間文化現象学会議」がオンラインで開催された。日本・中国・台湾・香港などを出身とする東アジア諸国の研究者が一堂に会する会議である。9 名の研究者が発表をおこない、最後の討議にはさらに 3 名が加わって、充実した会となった。プログラムは以下のとおりである（時間は日本時間）。

- | | |
|-------------|---|
| 9:30- 9:40 | 開会挨拶 |
| 9:40-11:00 | 亀井大輔（立命館大学文学部・教授）
「デリダの〈経験〉論」
黄雅嫻（台湾国立中央大学・助理教授）
「贈与から見たデリダのギフト現象学」 |
| 11:10-12:30 | 張偉（中山大学哲学系・教授）
「愛の秩序と心の論理—アウグスティヌス、パスカルからシェーラーまでの「西方心学」について」
佐藤勇一（福井工業高等専門学校・准教授）
「われわれのなかの異邦、異邦のなかのわれわれ ——
モンテーニュとケネーにおけるエコノミーと自然法をめぐって——」 |
| 14:00-16:00 | 朱剛（中山大学哲学系・教授） |

- 「与える者か、与えられる者か？—マリオンの「自我」に対するラディカルな解釈について」
鈴木崇志（立命館大学文学部・准教授）
- 「フッサールにおける共同精神と歴史的世界」
廖欽彬（中山大学哲学系・准教授）
- 「田辺元の西田批判と現象学」
16:10-17:30 張政遠（東京大学大学院総合文化研究科・准教授）
- 「「形なきものの形を見ること」と「声なきものの声を聞くこと」」
方向紅（中山大学哲学系・教授）
- 「「貞」の現象学的経験に帰る」
17:40-18:40 討論 討論参加者 谷徹（立命館大学文学部・特任教授）、
加國尚志（立命館大学文学部・教授）、
鄭辟瑞（中山大学哲学系・教授）
- 18:40-18:50 閉会挨拶

この会議はもともと、立命館大学文学部の谷徹氏と中山大学の哲学研究者との長年の交流にもとづいて、中山大学の哲学系教員の意向を受け、立命館大学の間文化現象学研究センターが立案したものである。2016年11月に開催された第1回の会議では、中国と香港から5名の研究者を立命館大学の衣笠キャンパスに招き、中国・広州の中山大学から3名、立命館大学から2名が発表し、議論した。発表内容は西洋の哲学や現象学だけでなく、日本や中国の哲学・倫理学などに及んだ。また小さな居酒屋での懇親会も賑やかで、旧交を温めたり、新たな出会いがあったりと、終始和やかな雰囲気だった。会議での発表にもとづいた論文の日本語版は、『立命館大学人文科学研究所紀要』第113号に特集として掲載されている。また、同じく中国語版が中国の学術雑誌『中国現象学与哲学評論』第二十四輯に掲載されている。

これを第一弾として、第2回の会議を開催したいとの打診が中山大学の廖欽彬氏より寄せられたことが、今回の会議の発端である。当初は2020年2月の開催に向けて準備を進めていたが、新型コロナウイルスの影響を受けて延期となり、このたびオンラインであらためて実施することができた。

今回の会議でも、前回と同様に「間文化現象学」をキーワードとしつつ、西洋の哲学から日本哲学・中国哲学にいたる幅広い議論が行われた。発表者の発表は、それぞれのテーマについての本格的な研究の最新成果を披露するものであり、議論ではたいへん活発で忌憚のないやりとりが続いて、水準の非常に高いものとなった。

この小特集には、この会議での発表にもとづく7本の論文を掲載している。なお佐藤勇一氏の原稿は『立命館大学人文学研究所紀要』第114号に、亀井の原稿は『立命館文学』第665号に掲載されているので、併せてご参照いただければ幸いである。

終了後、第3回は中山大学にて対面で実施することが提案された。そのときは日本側が広州を訪れて、再び議論を交わすことができればと思う。

立命館大学文学部教授
亀井 大輔

